

情報通信審議会 情報通信技術分科会 産学官連携強化委員会  
重点課題WG（第1回）議事概要

1 日 時 平成21年10月20日（火） 13時30分～15時30分

2 場 所 総務省10階 1002会議室

3 出席者（敬称略）

構成員

森川博之（主任）、伊藤崇之、宇野嘉修、冲中秀夫、勝部泰弘、加納敏行、唐弓昇平、木下進（代理：石川丈二）、関口潔、谷口浩一、富永昌彦、西村信治（代理：池田博樹）、端山聡、森田温（代理：千葉勇）、横井正紀（代理：中林優介）

事務局

奥英之（技術政策課長）、山内智生（同課研究推進室長）、藤田和重（同課企画官）、杵浦維勝（同課課長補佐）、藤井信英（同課課長補佐）、他

4 議事要旨

（1）諮問事項及びワーキンググループの運営について

事務局より、参考1、参考2及び参考3に沿って諮問事項「デジタル新産業創出に向けた研究開発加速化のための産学官連携強化方策」（平成21年7月10日諮問第15号）及び本ワーキンググループの運営について説明があった。

（2）WGの検討事項について

事務局より、重-1-1、重-1-2及び重-1-3に沿って本ワーキンググループの検討事項について説明があった。

（3）WG構成員からのプレゼンテーション及び議論

伊藤構成員（日本放送協会放送技術研究所）、冲中構成員（KDDI）、加納構成員（日本電気）、谷口構成員（日本アイ・ビー・エム）及び富永構成員（情報通信研究機構）よりそれぞれプレゼンテーションを行った。その後の主なやりとりは以下のとおり。

冲中構成員：「官」の役割だが、国が資金をどう提供すべきかという話と官が持つ研究機関が何をすべきかという話を、人によっては混同してしまうのでは。

事務局：「官」と言った時には両方含まれるが、特に規定している訳ではない。両者合わせてご議論いただければ。

事務局：冲中構成員のプレゼンテーションで、ビジネスモデルが明確でない領域に国が重点を置くべきとの意見があったが、どのような領域か。特に選定の視点などはあるのか。

冲中構成員：特にというわけではないが、UI（ユーザインターフェース）の出来不出来でもってエンドプロダクトの成功が決まると思うので、そのあたりに国のリソースを投入すべきではないか。

伊藤構成員：ビジネスモデルが明確ではない分野というのは、主に基礎研究の分野という理解でよいか。

冲中構成員：そう。出口が見えず、これをやったらいくら儲かるのか読めないようなところ。

森川主任：先が分かっていることは「産」がやる。「国」がやるのは先が見えないもの。ただそうすると先が見えない中でどういう技術を選択をするかが難しく、強い思いでやるしかない。

伊藤構成員：そこは大学と官（NICT）では自ずと違いが出てくる。官（NICT）は国としてやるべきことを優先するが、大学はもっと幅広く興味の対象を見つけて深掘りしていく。

冲中構成員：ICTで何ができるかを考えるためには、技術者だけではなく心理学の先生なども巻き込んで議論すべきではないか。

- 森川主任 : 以前、別の会議である方がテクノロジードリブンに対し「エクスペリエンスデザインという言葉がない」と言った。やはりデザインとかそういったものは重要だが、それを国が支援するのは難しい。EUで携帯電話のエクスペリエンスデザインにファンディングしている例があり、ありえなくはないのだが。
- 事務局 : センスが求められる領域を国が主導してやるという選択はないと思う。「産」がやるところを国としてどう背中を押していくかをご議論いただきたい。
- 森川主任 : イギリスの「Show us a better way」というウェブサイトがある。国の情報を全部アップロードし、その情報を活用してアプリケーションを作成してもらうコンテストである。UIもコンテスト形式にするのはありだと思う。
- 谷口構成員 : 政府がやっているのか。
- 森川主任 : そう。アメリカでも同様のものを行っている。
- 池田構成員代理 : ICTというと上の世代を見がちだが、インターネットが当たり前の若い世代（小学生、中学生、高校生等）にどう使ってもらうかという視点も必要ではないか。そういう環境で育った人たちが新しいビジネスモデルとかアプリケーションを考えていくと思う。
- 唐弓構成員 : 本委員会の成果をどう活かすかという道筋は確立しつつあるのか。今の政権ではICTの優先順位が低いように思うが、そこを脱却する意味で何か進言をしていくというイメージはあるのか。
- 事務局 : 新政権においてもICTの研究開発の重要性は認めていただいと認識。ただ民主党のマニフェストは国民生活、環境問題が主であり、研究開発がどう国民生活に結びつくのか出口をイメージした上で、提言としてまとめることが重要。
- 谷口構成員 : 産学官連携強化の背景には何か反省があったのかと思うが、その反省のそもそもの原因から検討していくと、産学官連携のあるべき姿がイメージできるかと思う。そういった話もこのWGでやるのか。
- 事務局 : そこも含めて議論していただきたい。これまで国も民間も研究開発に金をつぎ込んできたが、ICTの製品としての競争力は低下しており、またその成果もどう国民に役立っているのか見えづらい部分があった。「研究開発」だけで捉えるのではなく、入口から出口まで戦略的に進めていくことが重要であり、そのためには産学官の役割を明確にしなければならないというのが諮問の背景である。
- 森川主任 : IBMの「Smarter Planet」のビジョンはNICITのビジョンに近いように思う。それだとすでに「産」がやっているのではないか。
- 谷口構成員 : 「賢い地球」の実現が可能となる3つの要素にはそれぞれ研究開発が必要。そこで出来たものをうまく組み合わせるソリューションパッケージにして実現することなので、1社でできるものではない。オープンイノベーションを始めとして、今までなかったものを産み出し、社会変革を果たしていくものである。
- 富永構成員 : 我々が描いているのはNGNの次の新世代ネットワークであり、そのようなネットワークを構築するのは産業界となろうが、基礎となる部分は我々がやり、徐々に産業界と連携していくことになる。また、ネットワーク技術なので、日本だけではなく欧米とも結集し知恵を出して作っていかなければならないが、そのきっかけを我々で作りたいたいと考えている。
- 事務局 : これまでも様々な技術戦略を立ててきたが、個別の技術開発の結果がどう社会的ニーズを満たすのかということに、説得力のある見せ方ができなかった。単なる技術課題の分類ではだめで、各々の課題が研究開発の結果、どういうシナリオで社会的ニーズを満たすのかを明確にする必要がある。社会的なニーズについては皆様のプレゼンでいくつか共通の方向性は見られるが、個別の技術課題とはまだギャップがあるように思う。
- 伊藤構成員 : 個別の社会的ニーズはこういう委員会では必ず出てくる議論だが、国が予算をとった後のフォローがないように思う。NECから技術課題と社会課題は常にリンクさせるべきという議論があったが、予算獲得後にはプロジェクトの節目で社会的ニーズに答えているかというフォローは必要。また研究者一人一人が技術課題の開発だけを目標にするのではなく、社会的ニーズの副産物がないか常に意識するような育成が必要。
- 森川主任 : 社会的ニーズと基盤技術の間の抜けている部分を、皆様の知恵でインプットして

- いただきたい。そうすればICTを表に押し出していける。
- 加納構成員 : テストベッドという研究成果を実証する場としてしか位置づけられていないが、米国では「イノベーションプラットフォーム」と呼び、最新のICT技術が導入されているプラットフォームで新しいアプリケーションやサービスを開発する場となっている。ICTの成果を出す場であると同時に、イノベーションを創出する場であると米国は定義している。我が国には潤沢な容量のネットワークがあるので、医療や自動車などに幅広く活用し、ICTが全ての産業の根幹にあるということを示す必要があるのではないか。
- 森川構成員 : 第2回のWGも同様の形式のプレゼンテーションを予定しているが、今回の議論を踏まえていただければと思う。またその他ICTの研究開発に関するアイデアがあれば、事務局へインプットしていただければと思う。今まで国の研究費は相対的に少なく、それである程度の競争力があるのは驚きではあるが、もう少し国の予算をうまく利活用できればよいのではないか。

(4) 審議スケジュールについて

事務局より重-1-4に沿って、今後のスケジュールについて説明があった。

(5) その他

特になし。

以上